

岡井省二全句集



角川書店

句集
明野

昭和四十三年—四十五年

わが思ふはじまりいつも鳩くるよ

ものの芽や夢の一字はくらがりに

青酸漿はじける寸前まで圧すも

みんなのみんなの眩き唇に合ふ

暗闇を鹿列なして横切りぬ

南天に月日さだまる実のありど

仰ぎみしのみにみるみる雪はげし

山姥の蜷暗きへ納むるも

隆
隆
たる
胸
筋
も
ち
て
春
の
風
邪

薔
薇
の
香
を
吸
は
し
め
胸
部
撮
影
す

安楽死乞はれ蓬野踏みしめをり

三伏の犀見てみたり笑ひだす

南に海八月の稲を刈る

かまつかや大沼わたるをところ声

豆柿にまさぐる旅の金米糖

嶽鳥居峠の神笹子日和の鼻ぬくとし

つばくらはいつでもはたと湧いてゐし

句集 鹿野

昭和五十一年

春
立
て
り
鶺鴒
が
そ
こ
に
坐います
神

春
は
あ
け
ぼ
の
鳥
の
子
の
襖
に
も

し
ば
た
た
き
昔
男
や
春
の
山

く
ら
く
ら
と
竹
山
出
づ
る
春
の
川

梅の村夕べ木椅子に土ついて

山晴れの夜に出会へば田螺和

日の散つてさくらの空を声の鷹

虎杖の萌えでし笑ひ仏かな

砂地より雲雀あがりて摂津なり

寒食の照りし川辺の磨崖仏

うらうらと札所を打つや麦鶉

奥降りのどこ暗からず蚕飼かな

川かげに鮪の並びて卯月なり

薔薇咲いて日ふはふはの烏骨鶏

水
口
の
神
の
白
幣
つ
つ
じ
山

人
の
灯
の
螢
の
川
に
と
も
り
た
る

水
分
く
る
土
囊
を
置
け
り
時
鳥

句集 山色

昭和五十五年

酒
や
つ
つ
て
枯
れ
ざ
り
し
松
春
の
鳩

宗
鑑
の
村
の
土
産
に
土
筆
か
な

初蝶の葭竹切りにまとひけり

春暁の杉生しづかにたちまちに

この大き鞍のさま置く春の山

引く鴨のかかるところに茶の畠

刈
株
の
傾
へ
の
原
の
残
り
雪

白
梅
の
空
に
と
ど
ま
る
日
波
あ
り

鳥雲に仕へて使ふ厨井戸

灯色またつたふる雛飾るなり

七七忌くろもじの黄の花の壺

杉立てる門の春べを書斎より

石垣に竹挿してある春祭

蝦竹瓮引きあげてゐる櫻かな

春ごとの最中の火をゆだねられ

さくらどき筒井の中に齒朶生かな

春
の
鷹
勸
請
注
連
の
深
空
あ
り

句集
有
時

昭和五十八年

初花の枝に触れたるあぎとかな

さくら咲き柱いよいよはしけやし

寒食の夕日につれし川の幅

この村に鮠の川ある念佛かな

弥生拾ひて大王松の松毬^{かき}を

雄ごころのときの乗込鮒つづく

花の山髪照つて日をはこびぬる

いちにちの春蟬のとき過ぎし山

ひとりひとり
沢ゆき朴の花の下

適塾の二階に
あたり夏の風

註、適塾は緒方洪庵の塾なり

めくばせのぐるり薄暑の草木あり

かなぶんのつるみ落ちたる飛鳥寺

みどりさすごととき般若の面テあり

脚強き芭蕉思へり時鳥

形代をいつたん置きぬ杜の石

里山の裾の篁夏の露

てつせんの花のみなそのかたむきに

句集 五劫集

昭和六十二年

狼毫の筆をとり
みしさくらかな

さくら
盈ち朝の
のこれる
水の上

ゆくりなく雪解の村にまぎれぬし

春早き身のうち笹の山の音

おもむろに大白鳥のこちらむく

風吹いて鳥追のこゑきかれけり

ゆ
ふ
べ
な
か
り
し
臘
梅
の
湖
月
夜

風
花
の
日
の
輪
の
な
か
に
祝
が
れ
ぬ
し

よろこびのうちむらさきを剥いて波

鴨のよくあがりて朝の東風の磯

青^{せい}墨^{ぼく}の佳^ききうすまりに梅^{うめ}咲^さいて

水^{みづ}取^とにぬ^ぬくき夜^よのあ^あり局^{つぼね}の間^ま

くろもじの花に人くる信貴の村

円位忌をただ小牡鹿につきをりし

しばらくや阿吽のあひの松まつ雀むしり鳥

開山堂日のあるうちに椿みて

れんげうや壺をつつみてふるしきに

句集
夏
炉

昭和六十三年

の
ど
も
と
に
さ
く
ら
咲
き
か
け
山
に
ゐ
き

桜
鯛
翁
の
と
き
の
父
訪
は
む

花に臥て天の汀に目のあそぶ

文殻がひびく手毬のつかれをり

寒明の翡翠とべり湖の上

顔ありて昼からの葦刈りはじむ

葦刈のかげに加はり葦刈りぬ

寒蘭の夜のおとがひのありにけり

猪食うて雪がふりこむ紙屋川

かつみの芽おほぞらしぶきぬたりけり

葭地焼念佛は別にきかれけり

春霰の汝をともなひをりしなり

二の腕のふしぎなりけり鳥雲に

松林の端みて砂嘴の鴨を見る

まなぶたの見の近さにて雁かへる

紙衣かみこいまほしきまなこと知られをり

月
明
の
闇
忘
れ
た
る
花
辛
夷

句集
前後

平成
元年

あ
か
あ
か
と
灘
も
大
濫
團
扇
か
な

朝
は
よ
く
見
ゆ
る
ま
な
こ
よ
夏
の
蘆

權の音更々嬰粟のま晝なり

あやめ草見えぬてものをねぶるなり

蛇の野に古典にわれをつれてゆく

灰かぐらにはかに夜の茂りかな

涼しさのたちまち湖の音なりし

めくばせの鼻の野にいでゐたりけり

あちこちの嬰粟に言ふれゆけるなり

六月の桔梗湖の朝の音

さみだれ萩ときどき油断してをりぬ

なつかしき木の家にをり額の花

白南風の雙耳となりきつてゐし

まんまへの炎天に人はひりくる

三伏の藪の雨見る机なり

まくは瓜慌てずに食べぬたりけり

し
ん
と
天
牛
近
江
八
幡
驛
の
柵

句集
猩
々

平成三年

春はもとより能の衣の猩々緋

春日あり槐の幹に靈芝あり

ある高さより大室の鳥ぐもり

霾天にして鵲の巢を仰ぐ

藏六の雨の庭這ふ虚子忌かな

註 藏六は龜の異稱

かげろふに仙紙三反抱へゆく

註 仙紙は畫仙紙の略

喉
佛
け
ふ
片
栗
の
花
の
上

鳥
雲
に
帯^{おび}
解^{とけ}
に
顎
あ
げ
に
け
り

註 帯解は奈良の地名

花しづめ圓座の上に坐りけり

鶉の礁今朝のさくらの彼方かな

防風掘る世にはじめての日のごとく

貌となりつゝ四月中照らされし

あかくと若布をひろげたる戀は

ひつくり返し突つつき吾等馬糞うに

ふじつばや吾に凹みて春の天

大室と頭交はる櫻鯛

同行二人春蟬に貌のあり

句集 鯨と犀

玄鯨抄 平成五年

え
ゝ
五體してをる峯の櫻かな

春の巖おもて拭へば鯨の圖

鯨の墓山をとこらの春羽織

春の雁かむろの空と思ひをり

百八つほども摘みたる土筆かな

空海や口ぎざくのたから貝

鳳蝶のいろうてみたる密寺かな

さくら咲き河馬がおからを食べてをる

さくらまつ盛り長髪の象つかひ

花冷のあてにしてをる池ひとつ

臥てあたま横にして見るさくらかな

ゑり善に色を見に入り花まつり

烏貝麩となつてゐたりけり

薄着して復活祭の書肆にをり

行きずりに鮠の匂ひの男かな

金平糖嚙んでをりたる更衣

いまだ穂の茅花を割つて海を見る

句集
鯛の鯛

空の章
平成九年

元
日
の
暴
悪
大
笑
面
の
顎

み
み
づ
く
の
耳
の
ふ
た
つ
が
初
あ
か
り

てのひらの上にはぜたるほんだはら

雪晴の砂丘嗅ぎゆく狐なり

味噌部屋にプリズムあそび山眠り

大池の空日がわたり鴉の贄

月光のあそび柄なり
鳩かいつぶり

鏡開障子に影のとびにけり

梟を衣としたる寒九かな

薄氷の肉桂いろに寝いを積める

墨
一
丁
が
天^{あめ}
地^{つち}
の
二
月
か
な

硯
墨
紙
筆
穴
を
出
で
し
墓

筆立に筆鳥風となりしなり

流砂はじまりて黄沙となるころ

あ
ん
ぱ
ん
の
つ
ら
の
ご
ま
粒
春
の
雁

疋
物
を
仕
立
て
て
み
た
る
常
樂
會

笑
う
た
り
も
の
を
言
う
た
り
む
め
の
花

句集
大
日

I
0
||
1
||
2

夏至
金色
夏至
の大
日如
来な
り

巽^{たつみ}
よ
り
乾^{いぬみ}
へ
の
虹
潮
の
空

大日や吾のそびらに夏鯨

茉莉花は耳の傍から咲きにけり

水貝を食^をして
みたりき星の飛ぶ

形代は流れ
巫^{かんなき}残りたり

只
今
只
烏い
賊か
一
杯
の
真
炎
天

七
月
の
こ
れ
金
色
の
涅
槃
佛

仙^サ人^ボ掌^テに声かけてをる旱星

一頭二頭太^{うづ}秦^{まさ}に朱夏の牛

飯島耕一著『六波羅カプリチヨス』

六波羅やつうびつうびと法師蟬

綱引いて地下の鐘鳴る夜の桃

いちじくや或^{ある}はタツノオトシゴと灯と

射^{ひあふぎ}干や夕べを鈴木大拙忌

註 昭和二十年八月二十六日他界

玉虫貝に昼月の虚空かな

月明に指のみづかき躑八処かな

波
音
と
う
こ
ん
の
花
と
頤おとがひ
と

Ⅲ
虹の蛇

大
日
や
年
の
天^{シリ}
狼^{ウス}
海
の
上

平成十五年十二月二十六日発行

著者 岡井省二

発行者 田口恵司

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

〒 一〇二—八—一七七

電話 〇三—三八—一七—八五三四

振替 〇〇—一三〇—九—一九五二〇八

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社 黒田製本所

©Shoji Okai

2003 Printed in Japan

ISBN4-04-651706-9 C0092

岡井省二全句集

槐選書



「岡井省二全句集」のPDF版は、各句集の冒頭二頁を収録
しました。また、最後の一句はこの句集の末尾の一句です。

俳誌のサロン